

松下幸之助記念志財団 研究助成

## 研究報告

(MS Word)

## 【氏名】

田中浩喜

## 【所属】(助成決定時)

東京大学大学院 人文社会系研究科

## 【研究題目】

フランスの脱宗教性の地域的多様性—19世紀末のパリ、リヨン、ボルドーにおける病院を事例に—

## 【研究の目的】(400字程度)

本研究の目的は、「フランスの脱宗教性の地域的多様性」を示すことで、脱宗教性の画一的な理解を問い直すことにある。フランスの脱宗教性(ライシテ)はしばしば、厳格な世俗主義・政教分離のことであると理解されている。しかし、実のところ、脱宗教性は歴史のなかで多様なかたちをとってきた。本研究では、これを証明するための事例として、19世紀末のフランスにおける病院の脱宗教性を取り上げた。

フランスの病院では伝統的に、医師や看護師と肩を並べ、カトリックの司祭や修道女が働いていた。しかし、19世紀後半になると、病院から宗教色をなくそうとする脱宗教化の動きが強まってくる。病院の脱宗教化は実のところ、地域ごとに異なるかたちで進められている。パリでは宗教者を排除することが脱宗教化とされたのに対し、ボルドーではプロテスタントと協働しての病院の近代化が脱宗教とされた。またリヨンでは、世俗の病院管理局が修道会を介さず宗教者を直接管理することが、病院の脱宗教化とされた。

そこで本研究では、19世紀末のパリ、リヨン、ボルドーにおいて、病院の脱宗教化をめぐる議論はどのように異なっていたのか、さらに、なぜそうした地域差が生じたのかを解明することを課題に定めた。

## 【研究の内容・方法】(800字程度)

上記の課題を解決するため、本研究では、①三都市における脱宗教化の展開の差異、②三都市の病院が置かれていた制度的状況、③三都市の病院が置かれていた宗教的状況の三点に注目した。

第一に、三都市における脱宗教化の展開の違いを、市議会・病院管理局・現場医師の三集団の議論を取り上げながら明らかにした。その際には、各集団がどのような政治的・社会的背景のなかで、病院のライシテ化に賛成ないし反対の立場をとっていたのか、そこでは脱宗教性や脱宗教化という概念がどのように理解されていたのかに加え、各集団の議論が相互にどのような影響を与えていたのかに注目した。

第二に、三都市の病院が置かれた制度上の違いを明らかにした。三都市の病院が異なる法的枠組みに置かれていたことは、先行研究のなかですでに明らかにされている。そこで、本研究が特に注目したのは、自治体の病院を管轄する病院管理局がどのような役員により構成されていたのか(政治的立場は共和派か否か、職業は医師か否かなど)、そして、市議会および現場医師とどのような関係をもっていたのかである。

第三に、当時の三都市の病院が置かれていた宗教状況の違いを明らかにした。病院看護を担っていた修道女、宗教儀礼を行っていた司祭は、都市ごとに異なる宗教的背景(所属修道会・所属司教区)に置かれているため、これを確認した。具体的には、病院で働く宗教者の名簿を文書館で入手し、宗教者の名前と所属を確認した。先行研究では、三都市における病院修道女の実態は多少明らかにされているが、病院付司祭の実態についてはほとんど明らかにされていない。そこで本研究では、先行研究の蓄積を発展させて、病院修道女の実態を一層究明することに加え、病院付司祭の実態を新たに解明することを目指した。

以上の研究の遂行にあたっては、三都市の文書館での史料収集を行った。本助成期間中には、2020年1月～2月の約4週間、パリ、リヨン、ボルドーで史料調査を行った。利用した主な文書館は、パリ病院公共厚生局文書館、リヨン市立文書館、ローヌ県立文書館、ボルドー中央文書館、ジロンド県立文書館である。

【結論・考察】（400字程度）

本研究の結果明らかになったのは、パリ、リヨン、ボルドーにおける病院のライシテ化はそれぞれ、「排除型のライシテ化」、「管理型のライシテ化」、「峻別型のライシテ化」と整理できることである。

パリの「排除型のライシテ化」は、「追放」と「代替」の二原理に基づいている。パリでは1880年代を中心に、急進共和派の市議会議員デジレ・ブルヌヴィルが、病院から宗教者を「追放」と同時に、世俗人員によって宗教者を「代替」したのである。この急進的政策が可能になった理由のひとつは、パリの病院を管轄する公共厚生局が財政面で、急進共和派が影響力を有する市議会に依存していたからである。

リヨンの「管理型のライシテ化」は、「監視」と「利用」の二原理に基づいている。リヨンでは1880年代以降、市議会のなかで宗教者の排除が再三検討された。しかし、リヨンでは結局、病院から宗教者が排除されなかった。それは、リヨンの病院を管轄する運営総会のアルマン・サブランが、リヨンの病院修道女はカトリック教会から独立しており、世俗的な運営総会の厳格な「監視」のもとに置かれていること、宗教者は医師や病院長に精神的権威を与える存在として「利用」可能であることを強調したからである。

ボルドーにおける病院のライシテ化は、「敬遠」と「協働」の二原理に基づいていると思われる。ボルドーでは1900年代に病院のライシテ化の是非が議論された。しかし、ボルドーでも結局、病院から宗教者が排除されなかった。それは、市長のポール＝ルイ・ランドが、宗教者を排除するパリ流のライシテ化ではなく、世俗権力と対立するカトリックに聖アンドレ病院を委ねる「敬遠」と、プロテスタントと「協働」しながら世俗的なトンデュ病院を近代化させるという「峻別型のライシテ化」を目指したからである。

助成期間中には、特にパリとリヨンの事例の比較において成果を出すことができた（拙論『『監視』と『利用』――第三共和政前期のフランス・リヨンにおける病院のライシテ化』『上智ヨーロッパ研究』12号、2020年）。今後は、更なる史料調査ののち、パリとボルドーの事例の比較研究を具体的な成果にしたい。